

二〇二四年(令和六年)七月一日發行(毎月一回一日發行)

香蘭

第一〇一卷第七号

村野次郎創刊

香蘭



2024年(令和6年)7月号

第101卷

第7号

通卷1123号



香 蘭

2024年(令和6年)7月号
第101巻 第7号 通巻1123号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(107)
招待作品(奇数月連載) ⑤春の図書館
作品

二
三

推薦香蘭集

香 蘭 集

十首選(五月号) 桜井 京子選
高畠 憲子選

十首選(五月号)

桜井

京子選

一頁公論(38) 心を育てる

千々和

丑山

村野次郎への旅(171) 昭和期の「香蘭」(六)

千々和

千々和

「香蘭」とともに(9) 近代短歌

千々和

千々和

続・酔風船(5) 空港の夕焼け

千々和

千々和

エッセイ・自由研究 古典は礎、そして守破離へ

能城

能城

作品一 小道具が生きている歌

満木

好春

作品二

松沢

美美

作品三

大井田

幸子

「香蘭」とともに(9)

近藤

弓

七首抄(五月号)

丸山

脇谷

緑地帯

脇谷

手島

明宝研究会第一五〇回

千々和

矢口

三月例会 最近の五歌集を読む

斎藤

三神

他誌拝見

八木橋

永井

明宝研究会第一五一回 四月例会 私と短歌

篠永

祐啓

他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向

路洋久

みどり

『村野次郎全歌集』を刊行しました

千々和

美知子

歌会及び会合・会員消息・他

藤田

恵子

編集後記・新宿日記

路洋久

千々和

表紙絵

山口

蓬春

「桃」

目次・緑地帯カット

和田

表二

90

表三

85 84 81 80 77 62 57 56 54 52 50 48 46 44 31 30 20 15 18 16 39 38 32 24 4 2

足るを知り面なごやかに姉は老ゆ

あまた孫らにとりかこまれて

これは「兄弟姉妹」のタイトル一連八首の三首目に置かれている。昭和38年、久々に生家を訪れた時の作品。因みに七首目に置かれた作品は、(十一)と指折りわれの数へんに遡きては足らぬ四人はらから)だから、十一人兄弟姉妹の先生の何番めの「姉」だろうか。

初句で思い出すのは老子の「知足」(現状を満ち足りたものと理解し不満を持たないこと)の言葉だ。今の境遇に満足して「面なごやかに」、心豊かに暮らしている様子の老いた姉を、先生も微笑ましくも、しみじみとした思いで眺めているようである。

ここでは三句の中心に置かれた「姉は老ゆ」の「老ゆ」が印象深い。例えば「面なごやかに姉はをり」では、当たり前だろう。「面なごやかに姉は老ゆ」と表現されたことで、「姉」と、作者ご自身に流れた豊かな歳月が偲ばれる。

『村野次郎歌集』

加藤 英彦

春の図書館

ありふれた白いシーツが揺れているベランダにはそき蜻蛉がとまる
夢のはじめにもどれば道に腕のない人形ひとつ捨てられてあり

街路に犇ぐアメリカのデモみて呻る醉鯨二合と串刺しの肝

手を伸ばせどとどかぬ空よあの日から仰ぐばかりの細きほそきガザ

床下にふかき穴あり息をころして神経叢のごとき回廊

骨きしむまで搏たれつつ吊るされるもつと痛くない殺されかたが

死のきわの願いを訊かれ一掬の水欲ればあたまに尿あびせらる

抵抗のこぶしはおろし生きるためには配給も盜らねばならぬ

シャワー浴びるたび抜けおちる頭髪にひかりあふれる夢のおどろに

春の図書館をでるとき数冊をたばねて括る結束バンド

◇ 招待作品 ◇ 奇数月連載⑤

最近、また当事者性ということを考えてい
る。以前、東日本大震災のときに歌壇でも話
題になつたように思うが、わたしの話はそれ
とはすこしズレるかも知れない。当事者でも
ないのに分かつたような顔をするなどはメディ
アのコメントーターの無責任なもの言いにし
ばしば浴びせられる。当事者でないわたしも
そう感じることはまるあるが、それでは当事
者性とは何で、当事者の思いとはどこまで付
度してだれが語れるのだろうか。

だれも他者の痛みを痛むことはできない。
だから痛みとは激しく孤独なものだと言つた
のは辺見庸である。かつて、私は私しか代弁
できないと語つたのは吉本隆明であった。わ
たしもまた、他者の悲しみを等分に分かち合
うことなどできないと思つている。当事者の
悲しみの質量を前にわたしはどこまでも他者
であり、せいぜいわずかばかりの想像力でわ
が身に置きかえて思いを重ねる程度のちから
しかもち合わせていない。

例えば、東日本大震災の津波に攫われた人
が濁流のなかで目にしたもののが何であつたの
か、ガザ地区で殺された人の無念の深さはど
れほどであつたか。それは当事者にしか分か

らないけれど、死者はもうそれを語ることができない。不確かな記憶で書くことを許して
もらえるなら、もし殺された者が最後に見た
ものを死後の眼球から映像として摘出するこ
とができるたら、そこには何が映つているかと
問うたのは高橋和巳であつた。最後に網膜が
捉えたのは振り降ろされる鉈であつたか狂氣
の殺意の目であつたか。

当事者性を語るとき、多くは当事者でない
第三者がどこまで当事者の身になつて発語し
ているかが問われるようと思う。それは大切
なことだが、わたしは当人の代弁者ではない
ので、わたしの想像力は当事者性を越えてど
んどん膨張してゆく。その膨張した先に加害
者がほつんと立つてることもあるかも知れ
ない。被害者の痛苦の深さへの共感を越えて
事件の本質を覗こうとしたとき、殺される直
前の被害者の網膜にわたしが映つていないと
だれが断言できるだろう。そこにわたしの小
さなブーチンが微笑んでいることはないか。
加害行為の当事者性とは、わたしが私の内部
の魔に会いにゆくことである。

飛ぶために墜ちゆく鳥の名を問わば梅川
昭美、鳴海清よ 渡邊浩史『赤色』

四選者 の 作品

サクラホテル 平塚 千々和 久幸

すれ違うほどの会いなり四十雀と雨の中に出会いしことも
うすあおく東の空の明けゆくを鳥の眼をして眺めていたり

土降る日

東京 桜井京子

さくら咲くサクラホテルにひと夜寝ね淫らな夢を見しが忘れつ
五十歳で逝きしわが友弁護士の近江福雄を時に思うも

後ろから三番目あたりが嬉しいと言いたる友もすでに世に亡き

店頭に都忘れの花ひらく憧るるものすでにあらぬを

ピーマンヒトマトが行儀よく並び塩昆布はもういいからと言う

お荷物になりましようがと往にざわに狐が稻荷を包みくれたり

戦争の評論家多く現れてロシア・ウクライナの紙芝居見つ

サクラの枝こつそり折りて病床の妻に見せしは十年前か

四十雀 我孫子 丸山 三枝子

植物も苦しむことのあるのかと植えてゆくなりガーベラの苗
風葬というにあらねど春風きて小雀のかばね攫えり

雨の日が嫌いではなく菜種梅雨 傘さしてゆく武藏野歌会

遠まわりして水呑みにやつてくる犬にも犬の夏が来にけり
嫌われ者のカラスなれども切なげに鳴きてゆくなり北東指して
四十雀のことを聞かれて話しつ私はいつか四十雀になる

思ひなほし忘れなほして風とのとほき郷里に春めぐり来る
土降る日うみの彼方のひととこる明るさありて照りはじめたり
どうしやうもなきことあれこれ考へて風に揃まるる酢漬草の花
思ひきり捨てむとすれば這ひ出たる紙魚といふ虫本の虫なり
「電気料金未払ひのお知らせ」ああまたかネットの奥より間が来てゐる
その件は確かにネットで見たと言ふネットに錯誤あるとこそ知れ
棕櫚の木が枯れてしまへり公園の五本のなかの都合三本
誰からもラインの來ない日曜の夜が好きなり春闌けにけり

母逝く 横浜 渡辺 札比子

見舞いたる帰路に危篤の知らせ来て母のホームにとつてかえせり
できるのはこんなことだけ 死に隣る母の冷たき脚^{ひじ}摩りおり
兄とわが昔話をしていたる一瞬を母の呼吸止まりたり

臨終に間にあわざりし妹の嗚咽が響く春のあしたを

曾祖母の棺に白き花納むおさなき子らは遊びのごとく
脇やかに子らは折り紙していたり曾祖母の荼毘に付さるる暇
認知症を病みて十四年コロナにも打ち勝ちし母白寿まで生く
哲学堂の桜見に来よというごとく花の季に逝く父また母も

一頁公論

(38)

心を育てる

丑山 真弓

「短歌を一緒に学びませんか。」などと声をかけると、ほとんどの方が「えつ、短歌、そんな高尚な趣味は、私できないわ。」「難しそうだからパスね。」と断わられます。短歌の世界に居る身としては、そんな事はないのに……」と思うのです。知らないからなのです。知らない解らないから、難しいと思うのです。

日常のいろいろな事柄に感情を遣わない人はないでしよう。そしてその感情を言葉で口にすることはあっても、文章で表現することに慣れていない人は、難しい事、と感じるのでしょう。ですから、いきなり短歌をと説いても断わられるのは、当然な事かもしれない。私も嘗ては、難しそうに見えていました。私が短歌を知り、作歌を始めたのは、五十年代半ばの頃でした。知人に誘われ、好奇心で

見学に行つたのが、きっかけです。気楽に出かけたものの、まったく始めての場所、始めで会う人達、何も動じない顔をして内心ドキドキでした。

部屋に入ると、七八名の会の方と真中に男の方が座わり、にこやかな雰囲気で始まりました。なんと真中の方は千々和代表だったようです。その時は、知らずわからずでどうな失礼をしたか、記憶はすでに消えていました。だまつてイスに座つて様子をながめているだけでした。

短歌の会とは、もう少し窮屈で古風なものと勝手に想像していましたが、とても和氣あいの空気がありました。

私は、短歌を読んだこともなく、知識としては、五七五七に言葉を並べ、景色を表現するものであるという程度でした。そんな素人をこの会は、受け入れて下さいました。今思ふと感謝に尽きます。

私はこの言葉を理解するために短歌を始めたのです。
私はこの言葉を理解するために短歌を始めたのです。

移ろい行く季節や生活の中の事柄を詠む事は、感性が豊かでなければなりません。知識も必要です。そして、感性はどこから出て来るのかと言えば、心の中からです。

詩魂を育てるとは、心を育てる事と短歌を学んで気付きました。これからも短歌を詠みつつ、心を育て、良い人生にしていきたいと思います。

らなかなか脱出できない時もありました。

最近、そのような時には、運動靴に履きかけて、散歩に出かけます。外に出て足を運ぶと気分が変わり、肌に感じる風、耳に聞こえる鳥の声、目に入る花や緑など、五感の働きで、言葉が浮かび出てくるようになりました。時には昔唱った童謡や唱歌が自然に口から出てくる事もあります。

作品一 十首選



(五月号作品から)

桜井京子選

・狂わざる時計というも何がなし疎ましきもの用なき身には

千々和久幸

狂わざる時計とは、時刻が正確に表示される電波時計のことか。電波時計はその誤差が数万年に一秒というから驚異である。かつてビジネスマンであった作者は、常に正確な時刻を必要としていたはずだが、現在はおおよその時間の中で行動して差し支えない。むしろ時刻を正確に刻み続ける時計など鬱陶しいものになつたのだ。

この歌は、立場が変わつたから時計が正確でなくともよくなつたというより、常に精緻を期するものの違和感の表明と読める。世界にはグレーゾーンや、かえつて曖昧にしておいた方がいいこともあり、あまりの細かさや綿密さは時に息苦しい。経験を重ねて見えて来た一つの詩的真実を暗示している作品といえよう。

きょうだいのライン会議の結論は揺るがず 母に胃瘻はしない

渡辺礼比子

次第に衰えていく母について、きょうだいの間で何度も數えきれないほど議論を交してきたことが窺われる。母の最期をどう迎えるか正解があるとは思えないが、迷いつゝもきょうだいとして辛い決断をしなければならず、その心中は痛ましい。ラインという現代の

システムを活用し、確かめ合った結論「胃瘻はしない」は、苦渋の決断であったことが思われる。さらには長寿社会における現代の一族の姿が浮き彫りとなり、心に響いた作品である。

・学生の気分に戻りし束の間をパラソルくるりと回し別れぬ

石井雅子

久し振りに学生時代の友人に会つた折の歌か。ひと時、昔に戻つて会話が弾んだが、別れの時が来れば目の前に現実が待つている。

明るい日差しの中で回したパラソルが、甘やかな青春時代から現在に引き戻す儀式のようだ。感傷を引きすることなく、過去と惜別して歩き出す作者の姿が格好いいではないか。

・徹夜明けそのまま出勤まだいける残業終えてまだまだいける

伊藤康子

睡眠をとらずひたすら働き続ける作者。身体は大丈夫かと心配になるが、人間は徹夜をすると常よりも「ハイ」な状態になり、さらには仕事にのめり込んでしまうことがある。私にも覚えがあり、これは一種の中毒症状である。この一連のタイトルは「ヒステリー」だが、現代社会に蔓延する異常な感覚を、作者は自身に引き付けて体現して歌っているとも思える。生身であるからある瞬間に、蝶子が外れたように動けなくなってしまうのだが、この作者には歌うことによつて心を立て直し、逞しくあつてほしいと願つている。

・まつすぐに行けば少しは見えるだらういつもここらで戻つてしまふ

大井田啓子

まつすぐに行けば何が見えるか、それが分からぬではないか、などと言つたがれ。それは読者の想像に委ねられており、こちらの

感性が試されているのである。道の向こうには富士が見えるのかもしれない、あるいは比喩的な何かかもしれない。直進したい願望をもちながら、作者には何かこだわりがあったのだろう。あと一步を踏み出すことはしない作者。だがその先に広がる光景を、すでにこの作者は知っているのではないか。

・わが道というには少し鳥滸がまし人には内緒歌詠むことは

谷本 朝江

短歌を一つの「道」と捉えると、道を極めるためのたゆまぬ修行の道程を私たちは進んでいると言える。「香蘭」に入会以来三十年以上上の歌歴を持つ作者である。ひたすら高みを目指して歌い続け、なお「鳥滸がまし」と言い「人には内緒」とする謙虚さがよい。この間、人生や社会を凝視し続け、歌よみとして歌境を深めてきた歳月の積み重ねが尊い。今後共いつそうの精進を願つてやまない。

・睡る間に時は穏しく述きゆけり目覚めの窓に舞ふ雪を見る

手塚 春世

前夜は心地よく熟睡した作者か。起き抜けに見た静かな雪に充足感が漂う歌である。北海道在住の作者だから雪は見慣れているはずなのに、この朝の雪にはどこか新鮮な気分がある。それは上句の措辞の効果によるものである。よく眠つて穏やかな朝を迎えるのは、心身共に健康な証である。一夜降り続いたかもしれない雪、作者は眠りの中にいて知ることはなかつたが、目覚めて出会つた雪は作者に生きている喜びを与えてくれたであろう。

・バレスチナのガザが語源どうガーゼなり今は戦禍の血に紛れいる

満木 好美

現下のイスラエルによるガザへの侵攻を念頭に置いた時事詠と読んだ。ガーゼは本来ドイツ語だが、「広辞苑」にも「バレスチナのガザ地方産だったことによる名」とある。ケガの手当てに欠かせないガーゼが、今その発祥の地で戦禍による血にまみれ、その不足が深刻な状況にあることは、皮肉な巡り合せという他はない。声高ではないが、反戦の意志を含んだ静かな抗議の歌として印象深い。

・波音の聞こえぬ他郷に骨を埋め今年みつき師の七回忌なり

村上 美智代

西澤みつき選者の逝去から、はや六年の歳月が過ぎようとしている。生前のみつき師と濃密な親交のあった作者である。「土の手を洗ふ蛇口をほとばしる水も哭くなり他郷他郷と」は歌集『老化順調』に見えるみつき師の作。みつき師の郷里は南紀の海辺の町であったが、その望郷の思いをよく知る作者ならではの歌である。

多くの会員に慕われたみつき師だったが、「香蘭」が今年創刊百年を迎えたことを、泉下でどう思つておいでだろうか。この秋にはまた誘ひ合つて墓参に行きたいものである。

・猫柳だけでは寂しと折りきたる山の椿が土間にひらきぬ

渡辺 君子

山梨県大月市在住の作者。水辺に猫柳が芽吹き始めると、作者の暮しの周辺は春を待ちわびる思いがつのる。土間に猫柳を置いたのは作者の連れ合いか。そこへ彩りとして添えた山の椿が咲いたという、何でもない日常のひとこまに、山里に暮らすささやかな喜びがある。その情感を見事に捉えた歌である。季節の移り変わりを確かめながら暮らす作者の息遣いが聞こえるようだ。

作品一、三 十首選



(五月号作品から)

高畠憲子選

・混ぜればゴミ分ければ資源と書かれたるベンチに空を眺めていた

り 小原裕光

何とも飄々とした雰囲気を持つ作品。初、二句はゴミ分別の際の

標語であろう。その貼られたベンチに掛けて空を眺める作者。と
ほけた表情が見えるようだ。まるで自分が分別されるゴミのように
感じられたのかもしれない。なかなか鋭敏な感覚である。世の中の
ゴミとなるか、資源となるか。おかしさのなかに、シビアな問いが
隠されている。

・わが部屋はやっぱいいね乱雑な机の上に香蘭誌ある

庄司健造

一連の作品より、作者の体験した手術と退院の経緯がよく出ている。やはり、

わが家、わが部屋はいいもの。香蘭愛の強い作者は、日頃、本社歌
会や明宝研究会に熱心に参加している。久しぶりに戻った部屋の机
上には、いつもの香蘭誌がある。作者の歌の載つた香蘭誌が歌とと
もに、作者の帰りを首長く待っていた。また、よい歌が生まれ作者
を支えてくれますよう。
・三年後廃校と聞く高校の朝日浴びをり影をつくらす

作者の住まいの近くの高校であろうか。三年後の廃校が決まって
いるらしい。校舎は今も朝日をさんざんと浴びて立っているが、よ
く見ると、影が無い。まるで実態のない生き物のようだ。影を作ら
ず、とは意志のようにも読める。実景とも作者の心象とも読めてく
る。この少子化の時代を象徴する眼前の景と事実。結句に、これか
らの未来への不安感がそこはかとなく出ている。
・言ひたき事打つてしまつたこの午後を携帯電話伏せて過ごせり

田村久美

ラインだろうか、メールだろうか。人と人が文字で瞬時にやり取
りをする携帯電話。手紙なら、もう少し時間をかけて言葉を吟味で
きるのだが。デジタルのやりとりは、まつたなし。うつかり、言い
たい事を打つてしまつた、は誰しも心当たりがあろう。反省しきり
の作者なのだ。今日の午後は、顔を伏せ心を伏せて過ごしたい。こ
んな日は、元凶のスマートフォンの画面が見えないよう、裏返しに
伏せておこう。一度放つた言葉は戻つて来ない。共感の一首。

・かの時の原発誘致にきつかりと反対表明なしし珠洲びと

中井房江

作者のかけがえのない故郷、能登。連作(二)に産土を案する氣
持があふれている。復興が順調のところもあれば、まだまだ困難の
続くところもある。特に珠洲地区の事態は深刻であり、筆者の知人
も教え子さんといまだ連絡が取れないと案じている。「原発誘致」が
取り沙汰された時、反対表明した珠洲びとの賛美さが今更ながら思
われる。(きつかり)に並々ならぬ決意の強さが出ている。同じ作者

高田みちゑ

のもう一首。「鎮魂の花とし見おりほのかなる紅の入りたる白ざんかを」郷里の人びとへの想いと鎮魂。

・病む夫のご機嫌ふきげんを瞬しゆく氣づけば庭にふきのしゅうとめ

病む夫の介護の一場面を詠む。病人の機嫌はその時々で変わるのである。躊躇する、という言葉に、日々忍耐強く過ごされている作者の心がしのばれる。ふと見れば、庭には薔薇の茎が芽を出していたのだろうか。ふきのしゅうとめ、という平仮名が効いている。かなな柔らかさから、あたかも、夫の母からの「あなたもよくやつてくれて」という労りの声を感じたのではないだろうか。地中から顔を出しているのだから、この姑さんは故人のようだ。このような解釈は、あくまで筆者の想像である。だが、自由にドラマを想起させる力ある作品。

・二十余年体操教室続けおり出欠取るは生存確認

生田 紹代

二十余年、同じ体操教室に通い続けている作者であろう。おそらく、長い付き合いのお仲間もあり、なかには欠けていった方もおいでなのだろう。いつも取られる出欠が、なんだか生存確認のように感じられたのだろう。この高齢社会の様ざまな場面によくありそうだ。ユーモラスに詠んでいたがら笑えない現実。自分の生の確認、または確認されながら、どうぞお元気で。これからも教室に通われてほしい。

佐伯 弥生

・不登校そんなレッテル吹き飛ばせビニール風はぐんぐん昇る

安田 恵子

病む夫の介護の一場面を詠む。病人の機嫌はその時々で変わるのである。躊躇する、という言葉に、日々忍耐強く過ごされている作者の心がしのばれる。ふと見れば、庭には薔薇の茎が芽を出していたのだろうか。ふきのしゅうとめ、という平仮名が効いている。かなな柔らかさから、あたかも、夫の母からの「あなたもよくやつてくれて」という労りの声を感じたのではないだろうか。地中から顔を出しているのだから、この姑さんは故人のようだ。このような解釈は、あくまで筆者の想像である。だが、自由にドラマを想起させる力ある作品。

・二十余年体操教室続けおり出欠取るは生存確認

生田 紹代

二十余年、同じ体操教室に通い続けている作者であろう。おそらく、長い付き合いのお仲間もあり、なかには欠けていた方もおいでなのだろう。いつも取られる出欠が、なんだか生存確認のように感じられたのだろう。この高齢社会の様ざまな場面によくありそうだ。ユーモラスに詠んでいたがら笑えない現実。自分の生の確認、または確認されながら、どうぞお元気で。これからも教室に通われてほしい。

佐伯 弥生

・不登校そんなレッテル吹き飛ばせビニール風はぐんぐん昇る

勢いのある力強いエールを送る作者。送られる側のこの不登校の生徒さんは、お身内から身近な若者であろうか。私事ながら、筆者の身内にも不登校経験者がいる。(レッテル)の痛みはよくわかる。人生のある一時のひと休み。一緒にエールを送りたい気持ちである。下句の明るい景に若者の未来を象徴させた。ぐんぐん昇る、に言霊がある。

・どす黒き血液たっぷり採られたる今のわたくし少し清らか

中島 由美子

健康診断の一コマであろう。採られる血液は、だいたいどす黒いけれど。ふだん、あまり凝視はないものだ。この作者はしつかり観察。まるで、自分の内部のどす黒い部分を抜き取られ、少し清らかになつたと詠む。この茶目つ気とウイットが楽しい。わたくし、と改まっているところも、可笑し味がある。心の遊びをもつ作者。

・太宰府を香蘭旗手にガイドする荒巻さんの今し傀ばる

古澤 正道

平成二十六年。今をさかのぼる十年前。香蘭の全国大会が福岡は博多で行われた。この時の実行委員長は森田徹氏。一緒に実行委員を務められたのが、荒巻十三夫氏とこの歌の作者。先頃、荒巻氏は惜しい事にご他界。この一首は挽歌である。筆者もこの大会に参加しており、大変お世話になつた。太宰府でのガイド役でご活躍の荒巻氏の面影は、同じ古澤作品の(思いいづ荒巻さん人の人懐こい笑顔と好きな酒の飲みっぴり)にも、よく表れている。香蘭旗手に、といふところに、香蘭への想いが出ている。作者や読者の皆さんと一緒に、氏のご冥福を祈る。

佐伯 弥生

・不登校そんなレッテル吹き飛ばせビニール風はぐんぐん昇る

村野次郎への旅（171）

昭和期の「香蘭」（六）

千々和 久 幸

落す歌と「野の宅の人」みをいで、夕さむし
田中の道の青き冬草」はよい。
國民文学

試験の答案をしらべつ、

あやまりの答案多し悔ゆらくは吾が教へ方
のゆきとゞかざりし

大方の誤りたるは斯くのこと教へつけられ
りと柴の燃える臭ひとの、こんがらがつた微
妙な感じがまだまた出でぬない。四五句もや、
生ぬるいが纏まつてはゐる。（二）の歌、これ
も僕には度々経験のある境地で、三句以下結
句までは素直で實にい。初句二句は觀かた
が概略的で、これではかまどの中で渦を巻い
てぱちぱち燃え盛る火が出てゐない。第一句
の「かなし」も（一）の歌の第三句と同じ缺
點を持つてゐる。この二首全體としては、前
に云つた表現上の平凡な點を除いて、僕は作
者の氣持には共鳴できる。

（次郎）斯う云ふことを静に歌つてゆく植松氏
の純情的な態度を好む、この作者は短歌の外
形のみでなく常に心の動きを歌つてゆかうと
するところに好意が持てるのである。この作
者的心がよく窺ふことが出来るが氏とし
ては、もつと洗練された表現であつてい。
粗にすぎ聊か常套的のやうに思ふが。

引き続き「香蘭」第五卷第三號、昭和二年
(1927)三月号を読んで行こう。前号に読
み残した前月歌壇合評から。評者は今井嘉雄、
村野次郎である。

日光

茶粥たく柴のにほひもしたしけれ外の面は
霜のあかつきにして
かまどなるひのてはかなしむところよりとり
いだす書の文字をてらすに 中島 袁浪

（嘉雄）二首共に田舎の早朝の空氣が相當しん
みりと味はれる。田舎育ちで斯うした経験を
持つ僕は、作者の握らうとしたものには十分
の同感が持てる。朝茶粥を煮るのは、小生の
知る範囲では關西方面に限られてゐるやうだ。
其の朝茶粥を煮る柴のにほひと云ふのは一種
特別のもので（一）の歌、一二句まことに良
い。然るに三句が餘りに常套的で安易である。
此處でもうひとつ獨創的の句法が欲しい。單

（次郎）日光中今月氏の歌は殊によかつたと思
ふ。（二）は（一）に比較して重量が足りな
い。勿論三句の常套表現と末句が妥協的表現
で浮いて居る爲めである。（二）はくだくだ云
ふて好きな歌である。この次の本の灰を吹き
てゐるが何か心を牽かれるよい物を持つて
ゐて好い歌である。この次の本の灰を吹き

いているので左に引く。

六號雜記に冬野木枯が「一つの問題」を書

一つの問題

冬野 木枯

歌壇には有力なる後進の乏しいかを歎するに過ぎない。諸君、如何に。

短歌雑誌第一自選歌號を見て落膽したが、次いで發行された第二自選歌號では更に歎息せすにはあられなかつた。こんな位の歌で歌壇へ大げさに顔が出せるならといふ不平不満は小生の胸から離れない。雑誌に對する緣故、私交上の問題、其他のくだらない義理、情實で各雑誌の頭目から引つ張り出されるといふ弊のある歌壇であるなら、變窟なる、堅氣の歌作者は筆を投げ棄てるであらう。

歌壇はいざ知らず、書壇、小説壇等では屢々立つてゐる事実がある様である。又官公吏に至つては、上役人との芋蔓關係が立身の重大な事項となつてゐるが如くである。

扱小生は、かく公然と推挙さる、新進歌人の無價値なる作品が何故に、一人の怪しむものもなくして歌壇に通つてゐるか不可思議に思ふのである。だから、かゝる連中は殆ど實力なくして、義理情實によつて持ちあげられたものであらうと云ふ憶測をしてゐる譯ではない。たゞ、推薦すべき各大家の鑑査力の平凡さに一驚する許りである、又は、如何に、

本間 樂寛

凍るらむ

・子が眠りほのかにさむるころほひははり窓

・霜の紅のにはへり

中河 幹子

・庭垣に雪うづ高く吹き寄せて日ぐるゝま、

に風おさまりぬ

眞島 勝郎

・水かへて今は久しき水仙の莖立ちや、に弱
があり、○○賞などはたらい回しに受賞者が
決まるらしいが実情は範の中である。

しかし泡のような作品はやがて消え、しん
に優れた作品は世に残ると信じたい。村野先
生ではないが、「世の時流」をどう読み、これ
に「自己本然の姿」をどう対置させるか。歌
人一人一人が己に問うべき問題であろう。

・いたづらに悩まずに居む空のぼる日に向ひ

遠藤 正人

・心たらへり

森山 茂

編輯後記 村野 次郎
二月は日數が少なかつた爲め其れだけ運刊
してしまつたのは残念である。今月は何とか
して取かへしたいと思ふ。毎日氣にしながら
いろいろの仕事に追はれてゐるのであるが手
紙の返事も日曜毎に片付けてゐるが其も出來
ないことがあるので問合せは返信料つきか、
或いは幾度も催促して貰ひ度い。

・おきいで、いやくふしどにこもりたるわれ

・杉浦 翠子

・今朝の晴れ空に極ると思ひけり雪にしきた
・おきいで、いやくふしどにこもりたるわれ
の寝息もさびしまれつ、 村野 次郎

・尚今井嘉雄氏の「アンクルトムスケビン」は
上巻譯了され家庭文学叢書として去月出版さ
れた、これもいづれ本誌に紹介し度いと思ふ。

如月例會記及び今月の編輯後記も讀んでお
こう。
・如月例會記一二月十三日午後
・おきいで、いやくふしどにこもりたるわれ
の寝息もさびしまれつ、 村野 次郎
・今朝の晴れ空に極ると思ひけり雪にしきた
・おきいで、いやくふしどにこもりたるわれ
の寝息もさびしまれつ、 村野 次郎
・杉浦 翠子
・尚今井嘉雄氏の「アンクルトムスケビン」は
上巻譯了され家庭文学叢書として去月出版さ
れた、これもいづれ本誌に紹介し度いと思ふ。

「香蘭」とともに（9）鈴木 桂子

——近代短歌——

何となく短歌でもやつてみようかと思いつた、短歌を詠み始めた私は、師を持たず、近しい仲間も持たず、見よう見まねで短歌を作り始めた。置かれた環境や状況から、一人でもやれること、時間をかけずに、気軽に、手軽に、できればお金もかからないこと、それ以上でも以下でもなく、何か特別なものを求めるというようなことはほとんどなかった。当時の私には何かを「やつている」という思いだけで十分だった。生活に追われる日常に、自分のために「やるものがある」というだけで気持ちは十分満たされた。

今も同じような状況の中、見よう見まねでひとり歌を作っている。遊びの場があること、歌会等で直接師の指導を仰げることなど、羨しいと思うことはあるけれど、そういう環境になければ、錯誤を繰り返しつつ、自分で歩むしかない。それに若さも体力もすでにはない。心も言葉も老いている。どういいかえたとこ

も今は、歌集『長風』である。多磨創刊に参加し、白秋に師事していることなど、香蘭とは必ずしも無縁ではないかもしない。

・われひとり部屋をとざして両の手を虚しく置けり夜の机に 鈴木 幸輔・長風

この一首に目が止まつたのは、恐らくこの一首の中に私がいたからであろう。作者の姿が私の姿そのものに見えたのかもしれない。しかし事はそう単純ではない。見てているのは孤独な己の姿であり、心の中である。己の虚しさである。生きたいと切望しつつ、どうにもならない現実である。

・梵道の袈裟をながれて雨が降る絶望も夜もまた新しく 鈴木 幸輔・長風

私とて、絶望ばかりしているわけではないが、徒手空拳、巨大な現実の前に、自分の無

ろでそれが現実である。つまるところ、自分の今を知るところから私の短歌は始まらざるを得なかつた。心が湧き立つようなことはなくとも、己を知るには十分だつた。

私は現代として、〈私〉が〈私〉であつた、近代短歌が好きである。中でも鈴木幸輔が好きである。ある日手にした古い文庫本との出会いが、鈴木幸輔との出会いになつた。歌集『長風』である。多磨創刊に参加し、白秋に師事していることなど、香蘭とは必ずしも無縁ではないかもしない。

・われひとり部屋をとざして両の手を虚しく置けり夜の机に 鈴木 幸輔・長風

この一首に目が止まつたのは、恐らくこの一首の中に私がいたからであろう。作者の姿が私の姿そのものに見えたのかもしれない。しかし事はそう単純ではない。見てているのは孤独な己の姿であり、心の中である。己の虚しさである。生きたいと切望しつつ、どうにも生きられない現実である。

・梵道の袈裟をながれて雨が降る絶望も夜もまた新しく 鈴木 幸輔・長風

私とて、絶望ばかりしているわけではないが、徒手空拳、巨大な現実の前に、自分の無

力と無能を思い知られて何度も絶望を味わつた。この歌の作者もまた暗く重い心で絶望の夜にいる。彼に絶望は何度でもやつて來た。

続・醉風船（7）

千々和 久幸

空港の夕焼け——山本哲也のこと

山本哲也と言つても大方の歌人に知られることはあるまい。彼はいわゆる一九六〇年代詩人の一人であり、わたしと出会つた時には既に詩集『労働、ぼくらの幻影』によつて第三回現代詩手帖賞を受賞（一九六三年）していた。

大学は共に東京だつたが、それは後に知つた。当時のわたしは福岡市の外れの大橋団地に住み、彼は西鉄電車で一つ先の井尻の自宅に住んでいた。結婚はわたしが先だつたが、お互いの結婚式にはともに司会者として出席した。彼は名門の修猷館高校の教諭、わたしの会社は東京に本社があつたが、当時は天神にある支店に勤務していた。そんなある日、九州大学に谷川雁、吉本隆明が講演のためやつてきた。早速二人で示し合わせて講演を聴きに行つた。

講演の感想については二人とも沈黙したままだつた。しかし熱い思いを抱えて帰つたことだけは間違ひない。そして間無く二人だけの同人詩誌「砦」を刊行した。あとがきはいつさい書かないという意図のもとに。彼は「華麗に騒がしく」生きようと言つた。恐らくそんな思いで彼もわたしもこの時代を駆け抜けたのだった。

それから二人の上に長い歳月が流れた。わたしは短歌を捨てることはなかつたがこの間、歌集の他に詩集も四冊出したのだった。む

ろん彼も『夜の旅』『連禪騒々』『冬の旅』『静かな家』『一篇の詩』書いてしまうと』ほか詩と評論を多く残した。
だが口惜しいことにその彼は平成二十年三月十二日、七十一歳で彼岸へ旅立つた。三月十四日付の西日本新聞には追悼特集のほか、こんな死亡記事が出ている。

詩人で評論家、元第一経済大学教授の山本哲也さん十二日午後六時三十二分、大腸がんのため、福岡市西区の病院で死去した。七十一歳。福岡県立修猷館高校、同県立福岡高校の国語教師をしながら詩作に励み、一九六三年現代詩手帖賞、六七年福岡県詩人賞、九五年福岡市文化賞を受賞。九六年に北川透氏らと「詩と批評（九）」を創刊した。詩集に『労働、ぼくらの幻影』、評論に「詩が、追いこされていく」。八三一二〇〇五年、第一経済大（現福岡経済大）助教授、教授を務めた。（以下略）

わたしは彼に促されて背中を押されて詩を書き始め、今日に至っているが彼の令名に比べれば未だにわたしが詩を書いていることを知らない友人が多い。しかし彼は自らの履歴には二人で詩誌「砦」を刊行した機縁を忘れずに、必ずわたしの名前を出してくれた。そのように律儀で友誼に厚い詩友であった。

彼と最後に会つたとき、彼はふと「俺も七十年生きたからなあ」と天を仰いでボソリと言つた言葉が忘れられない。彼が癌であることを本人から直接聞いていたわたしは、一瞬返事に窮した。
彼の葬儀がすんで福岡空港に向かう時、窓には真っ赤な夕陽が見えたが、わたしはこの時の風景を未だに詩にも歌にもしてはいない。

それが友情だつたか無情だつたか、今もつて分からぬ。